

内村鑑三 闘いの軌跡(一)

A Critical Biography of UCHIMURA Kanzō (Part I)

関 口 安 義

SEKIGUCHI Yasuyoshi

第一章 敗者の家系と生い立ち

一 佐幕派の武士の子

内村鑑三は、一八六一(万延二・文久二)年三月二十三日、江戸小石川こいしがわ鳶坂上(現、東京都文京区本郷四丁目)にあつた上州じょうしゅう(現、群馬県高崎藩)の武士長屋に、父内村金之丞うしむき、母ヤソの子として生まれた。アメリカの艦隊が日本を開港させるため提督ペリー(Matthew Calbraith Perry)に率いられ江戸湾口、浦賀に來航した、いわゆる黒船騒ぎのあつた一八五三(嘉永六)年の後、八年のことである。父宜之は高崎藩士で、その長男としての出生であつた。鑑三が旧幕臣

の出であつたことは、まずは心に留めたいことである。彼は生粹きんすいの佐幕派の武士の子であつたのだ。

高崎藩は代々松平を称しただけあつて、徳川親藩であつた。初代は井伊直政で、一五九八(慶長三)年箕輪城から和田城跡に移るに際し、和田を高崎と改めたという。宜之の仕えたのは、大河内たがわち(松平)右京亮輝照てるあき(輝声)である。大河内輝声は一八四八(嘉永元)年十一月十日の生まれなので、一八三二(天保三)年十二月十八日生まれの宜之より十六歳ほど若かつた。彼は開明的な藩主であり、藩政改革や軍政の近代化を図ろうとしたりするが、思うようにはいかなかつた。一八六四(元治元)年の天狗党鎮圧には、下仁田で天狗党と戦うが敗走する。鑑三出生時は、祖父長成がその御側役を務めており、鑑三が五歳の時に、宜之が家督を継ぎ、輝声に仕えた。宜之は若い藩主の相談によく乗り、輝声も宜之を深く信頼した。

内村鑑三誕生前後は、近代日本の激動期にあたる。前述のように、誕生八年前の一八五三(嘉永六)年七月、アメリカ合衆国東インド艦隊司令長官ペリーが、当時鎖国状態にあった日本に開港を迫ってやって来て、浦賀沖に錨を降ろした。いわゆる黒船事件である。翌年二月ペリーは再来訪し、黒船艦船の威力の下、日米和親条約の締結を強要した。

ここに尊皇攘夷という声が、急激にあがるようになる。尊皇攘夷とは、天皇の権威を絶対化し、外国と手を切れという主張で、時代の合いことばともなる。それは幕府の「副將軍」と言われた水戸家を中心にして叫ばれたスローガンでもあった。江戸幕府は翌一八五四(安政元)年、不平等条約と見做された日米和親条約に調印、ほぼ同じ内容の条約をオランダ・ロシア・イギリス・フランスとも結ぶことになる。鑑三の生まれる七年前のことであった。

一八五八(安政五)年七月、日米修好通商条約の調印で、神奈川・長崎・箱館の開港が決まり、外国人の入国が自由となり、一八五九(安政六)年には、C・M・ウイリアムズ、ヘボン、フルベッキらのキリスト教宣教師も来日している。開国か攘夷かをめぐる動きは、日本の国論を二分した。將軍継嗣問題もからんで大老井伊掃部頭直弼と水戸の徳川斉昭とが対立する。開国を進めざるを得なかった井伊率いる江戸幕府は、アメリカ総領事タウンゼント・ハリス(Townsent Harris)の強圧的で巧みな外交交渉に負け、しぶしぶ開港条約を結んだ。そして反対する人々に対しては、安政の大獄と呼ばれる弾圧を断行、吉田松陰・橋本左内らを殺すに至る。尊皇攘夷を叫ぶ志士たちは、報復として江戸城桜田門外で井伊大老を襲い、暗殺する。それは一八六〇(安政六)年三月二十四日で、鑑三の生ま

れる一年ほど前のことであった。

歴史年表を繰ると鑑三が生まれた年には、アメリカ公使館通訳ヒュースケン(Henry Conrad Heusken)の暗殺や、江戸高輪東善寺にあったイギリス公使館が水戸藩浪士に襲撃されるという事件があった。また、翌年の一八六一(文久二年)には、薩摩藩士が横浜の生麦で、殿様の行列を犯したとの理由からイギリス人を斬るという生麦事件が起こっている。さらに一八六二(文久三年)には、萩藩尊王攘夷派の高杉晋作らが、品川御殿山に建設中のイギリス公使館を焼き討ちするという事件が見られる。薩英戦争があったのも、この年のことだ。一八六四(元治元)年には、下関海峡で英米仏蘭四国連合艦隊と萩藩が交戦するという、これまた大きな事件が起こる。

時代が慶応年間になると、王制復古の号令の下、風雲急を告げ、戊辰戦争を経て明治維新を迎える。「広く会議を興し、万機公論に決すべし」にはじまる「五ヶ条の誓文」と呼ばれる明治新政府の基本政策が布告されたのは、一八六八(慶応四・明治元)年三月十四日であり、続いて江戸を東京とする詔書が出るのは、同年九月三日のことである。同じ年の十月二十三日には、明治と改元し、一世一元の制度が定められた。が、国内の戦乱は続き、函館五稜閣が開城し、戊辰戦争が終わるのは、翌一八六九(明治二)年六月二十七日のことであった。

内村鑑三は、このような時代に生まれ、育った。彼は後年、そのことを感謝を込めて、回想している。晩年の日記(一九二八・一〇・二四付、「内村鑑三全集10」収録)に、彼は次のように記す。

○先週上州高崎に行いて以来色々な追想に耽ける。若し維新の

革命がなくして西洋文明が入つて来なかつたならば自分は今頃どう成つてゐたらうと思ふ。自分の世界は八万二千石の小藩で、家は五十石の小武士、まことに振はない身分であつたらう。勿論キリストの福音に接する機会もなく、又ソクラテス、プラトーン、アウガスチン、ルーター、カントをも知らずして一生を終つたであらう。さう思へば維新革命や西洋文明を呪うてはならない。矢張り明治大正の世に生れて来たのは幸福であつた。神と時代とに感謝しなければならぬ。

いかにも鑑三らしい回想といえよう。彼がこの世に生を受けたのは、まさに近代日本の夜明け前であつた。鑑三という名には、すでに何人もの先人が言及しているように、三度自己を鑑みるという意味が込められていたという。鑑三自身には、「日に三たび省るとは日に三たび自己の本性に還ることなり、人其自我以外に脱して彼の思惟に統一なく、彼の行為に秩序なし、故に彼は幾回となく彼の本性に還り、彼の分離錯乱せる智力才能を中集し、以て全身を挙げて彼の本分に当たるべきなり」という自己の名についての言説がある。内村鑑三の名「鑑三」が、「三鑑」から来ると考ふる論者は多い。管見に入つたところでは、山本泰次郎や斎藤宗次郎が、この見解に立つ。

他方、鳥井足の『評伝・内村鑑三』⁽⁴⁾には、「鑑三という名は、唐の忠臣魏徴が亡くなつた時、時の皇帝太宗が嘆いて言つた言葉「銅を以つて鑑とせば衣冠を正すべし。古を以つて鑑とせば興替を知るべし。人を鑑とせば得失を明にすべし。今朕一鑑を失う」という故事に因んでつけられたもの」とある。この意見に従うなら、父宜之

は儒学者でもあつたから、長男の命名に際して、出典を手近の漢籍に求めたとも考えられよう。確認の意味で今一度言う。内村鑑三は、佐幕派の武士の子として生まれ、高崎藩の儒学者の子として育つたのである。

その生涯には、内外のいくつもの戦争が影を宿す。幼児期の戊辰戦争（一八六八〜一八六九）にはじまり、東京英語学校時代の西南戦争（一八七八）、さらに日清戦争（一八九四〜一八九五）、日露戦争（一九〇四〜一九〇五）、第一次世界大戦（一九一四〜一九一八）に至るまで、ほぼ十年置きに戦争は起こっている。内村鑑三の時代は、戦争の時代でもあつた。内村鑑三を論じることが、彼がこれらの戦争に、いかに対したかを考えることでもある。

二 家系と父母、弟妹

高崎藩は上野国高崎に藩庁を置いた譜代藩で、当時の領地高は八万二千石、内村家は五十石取りの馬廻りという小身ながら、何代も続いた由緒ある家柄であつた。その先祖は、耶穌教徒を弾圧し、その功績によつて百姓から武士に取り立てられたのだという。鑑三はそうした家系のことを、一九〇二（明治三五）年十月十日に、当時寺院の多かつた柴高輪にあつた仏教大学で行つた英語の講演、「予の宗教的生涯の一斑」⁽⁵⁾の中で、以下のように言っている。

それは多分私が経過して来た困難の中の或部分は、矢張り諸君も遭遇しなければならぬ困難であるかも知れぬからであります、けれども其多くの部分、諸君が曾て諸君の信仰上

一度もお感じなかつた困難であらうと思ひます、先づ其第一の困難で殊に私共が信仰の初期に於て感じた困難は何であるかと申しますに、それは愛・国・心と・基・督・教の衝突であり、其衝突は今日吾々日本人が基督教を信する時に必ず免るべからざる衝突であります、私は極く詰らない者でございますが、然し矢張り日本の武士の家に生れたものであります、武士の家に生れたばかりでなく、私の先祖を調べると、先祖は詰らない百姓であつたのであります、鉄砲を撃つのが上手でそれが為に天草に耶蘇教徒が起つた時に、狙撃に行くために雇はれて、彼の地に行いて、大部基督信者を撃殺した、其お陰で武士に取り立てられたと云ふことでありますから、其子孫たる私が基督教を信ずることは、遺伝から云つても非常に困難でありました。

鑑三の父方の祖父長成は、武士道精神の塊のような人であつた。鑑三の英文で書かれた自伝 *How I Became a Christian* (山本泰次郎・内村美代子訳『余はいかにしてキリスト信徒となりしかわが日記より』) には、祖父長成のことが次のように記されている。

私の一家は武士階級に属していた。ゆえに、私は戦うために生まれたのであつて、ゆりかごのうちから——*vivre est militaire* 生くことは戦うことなり——であつた。父方の祖父は満身これ武士であつた。身に甲冑をまとい、竹製の弓と、雉の羽の矢と、五十ポンドもある火なわ銃とで美々しく装つて立ちあらわれるときほど、彼の幸福そうなたはなかつた。彼は国士の平穩なことを歎き、自分の職業を一度として実地に試み得なかつた

ことを残念がりながら死んだ。

何度も書くが、鑑三は佐幕派の没落士族の出である。厳密に言うなら彼は「群馬県士族」であつた。が、彼はこのことを重荷と思うどころか、四民平等の世を迎えても、むしろ誇りに思つていた節がある。それは後年彼の忠実な弟子矢内原忠雄をして、「私どもは平民の子で、士などと言つたつておかしいくらいに思つている。偉いとも何とも思つていないんですが、内村先生は平民より士の方が偉いと思つている」と言わしめたほど、鑑三は素朴なまでにその出自に誇りをもつていた。

それは矢内原忠雄と一高・東大で同期であつた芥川龍之介においても、言えることなのである。芥川家は、士族と言つても先祖は奥坊主である。それでも彼は、「澄江堂雜詠」(『新潮』一九二五・六) というエッセイの冒頭「臘梅」で、「わが家も徳川家瓦解の後は多からぬ扶持さへ失ひければ」としながらも、「今はただひと株の臘梅のみぞ十六世の孫には伝はりたりける」と書き、自身を士族芥川家の十六世と書いている。当時にあつては、士族の出は誇りであつたようだ。ちなみに芥川や矢内原が一高合格予定者として『官報』第八一三七号(一九一〇・八・五)で報じられた時には、氏名の上に「東京府士族」とか、「愛媛県平民」とか記され、誰もが仲間の族籍を知ることができたのである。なお、こうした「族籍」は、第二次世界大戦後一九四七(昭和三十)年の民法改正による「家」制度の廃止まで戸籍に記載された。

右の『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』には、祖父のほか、父や母や母方の祖父や祖母のことも出てくる。そこには「父は

祖父よりも教養があり、りっぱな詩歌をつくることができ、また人を統率する術を身につけていた。彼もまた相当な軍事的才能を持つ人で、最も粗暴な連隊を裏に見上げたやり方で率いることができ「た」とある。鑑三の父宜之が、教養のある儒学者であったことは、同書の以下のような記述を見ても言える。

私の父はりっぱな儒教学者で、聖賢の書物や言葉はほとんどすべて、そらんじていた。それゆえわたしの初期の教育は自然その方針にそって行われた。私にはシナの聖賢の政治道徳的な教訓はよく理解できなかったが、しかし儒教のおおよその気分は深く私にしみこんだ。藩主には忠義を、親と師には忠誠と尊敬とを、これがシナ道徳の中心題目である。儒教では、孝は諸徳のもととなりと教えるが、これは「主をおそれることは知識のはじめである」というソロモンの箴言と似ている。

鑑三は、このような父宜之を生涯尊敬してやまなかった。それはこれまた弟子の矢内原忠雄が、父謙一を生涯尊敬し、その死に際して強い衝撃を受けたことを語っているのにもどこか通じる。が、矢内原忠雄が父のキリスト教への入信を強く願いながら果たし得ず、死に至らしめたという悔恨の情は、幸いにも鑑三にはない。鑑三は忍耐強い祈りによって、父宜之をキリスト教に回心させているからである。

宜之は内村家七代に当たる。最初の妻ハナは十八歳で没し、次いで迎えたヤソが鑑三をはじめとする八人の子(六男、二女)を産む。が、育ったのは五人である。なお、宜之は鑑三が十二歳の年に県

役人を免官となり、二度と働くことがなかった。鑑三は、そうした父宜之を決して非難することはなかった。父の能力・識見・立場というものを、よく理解していたからである。宜之は以後先祖譲りの家屋敷と僅かな蓄えで、一家を養うことになる。

母方の家系に目を向けると、その祖父は「徹底的な禁酒家」で、「生まれながらの正直者」ゆえ、「物堅すぎた」面があったという。「正直のほかに才能を——もしこの輝かしい利己主義の世紀において、正直を一つの才能と呼ぶことができるならば——ほとんど持っていないかった」とされる。が、彼は早世する。母方の祖母に関して『余はいかにしてキリスト信徒となりしかわが日記より』には、「彼女は、働いたために生まれた。彼女にとっては——*vivere est laborare* 生くることは働くことなり——であった。彼女は四十年間、かよい女性性の働けるかぎり働いた。五十年ものあいだ、やもめの生活を送り、女手一つで五人の子女を養育し教育したが、一度として隣人を欺いたことも、借金したこともなかった」とある。

この祖母に育てられた自身の母ヤソについて鑑三は、「私の母は、この母親から仕事狂マニアを受け継いだ。働いてさえおれば、人生のあらゆる苦痛と悲哀とを彼女は忘れる。彼女は人生の荒波によって心を暗くする「余裕のない」人間の一人である。彼女の小さな家庭は彼女の王国である。彼女はどんな女王も及ばぬほどに、この王国を治め、洗いきよめ、養う」と記す。ヤソは宜之の後妻であり、多くの子どもを生み、育てたが、晩年は認知症を患い、精神に異常を来すなど、どちらかというところ不遇であった。鑑三には「戦うために生まれた」という父方の祖父の血と、「働くために生まれた」という母方の祖母の血が流れていたのである。

鑑三には四弟二妹がいた。このうち弟二人、妹一人が夭折している。成人したのは、達三郎・道治・順也の弟三人とヨシ(宜子)という妹一人であった。けれども兄弟の仲は、きわめて悪かったという。鈴木範久は内村兄弟の仲の悪さを指摘し、「仙台の木村康託に嫁いだヨシはともかく、これら三人の弟が長男鑑三に示した後年の仲違いの態度は陰惨ともいえるほどすさまじかった。ついに鑑三の生前に、達三郎、道治らとの和解の時は訪れることがなかった」と書いている。

鑑三生存中は、その兄弟姉妹に触れることは、タブー視されたが、近年は生地竹郎の「内村鑑三とその弟・達三郎 附、内村達三郎年譜」〔内村鑑三研究〕第2号、一九七四・六〇、小原信の「内村鑑三とその兄弟」〔青山学院大学文学部紀要〕第24号、一九八三・一一)や、それを基にした「内村鑑三の生涯 日本的キリスト教の創造」(PHP研究所、文庫版一九九七・六)、それに井上琢智の「内村順也」〔関西学院史紀要〕7、二〇〇一・三)などが、彼らの動静を伝える。他に鑑三の子息内村祐之と結婚した内村美代子の『晩年の父内村鑑三』(教文館、一九八五・二)が、近親者でなければ知り得ることのないことどもを明かす。

まずは、右の小原の本に、鑑三弟妹のプロフィールが簡略に描かれているので、紹介しよう(文庫版、七三〜七四ページ)。

鑑三には四人の弟妹がいた。達三郎、道治・宜子・順也の三弟一妹で、それぞれ個性のはげしい人たちであった。それだけでも大変であつたらうが、そのうえ毎日の生活が逼迫してして来たこと、それに兄鑑三に定職がなく、老いた父親の世話のこ

と、施設にいる母のために支払う費用のことなどで、生活は極度に窮乏していただろう、と思われる。

すぐ下の弟達三郎(一八六五―一九三四)は、鑑三とは四つちがいであり、兄のあとを追って札幌農学校に入学し、明治二十一年(一八八八)年七月、札幌農学校を第七期生として卒業している。達三郎はその年の夏、アメリカから帰国したばかりの兄鑑三について、北越学館に就職している。しかし、同年十二月、兄の辞職とともに帰京するなど、はじめは兄と似たようなみちを歩んでいた。だが、とびぬけ秀才の兄にくらべられると、達三郎がやや不利であつたのは事実である。

何よりも悲劇的なのは、鑑三兄弟の仲があまりよくなかつたことであろう。達三郎は兄の『東京獨立雑誌』にも執筆したりしてはいるが、途中から、たぶん母の入院のことなどで、二人の関係はこじれてしまい、死にいたるまで兄と和解することはなかつた。達三郎は仙台の尚綱女学校の教師となり、岩波文庫で『イミタチオ・クリステイ』(筆者注、『キリストにならいて』の翻訳を出している。昭和九(一九三四)年に六十九歳で死去しているが、達三郎は兄鑑三と同じ病氣、同じ年齢で亡くなつた。

道治(一八七二―一九四三)は兄鑑三と十歳ちがうが、小学校だけの学歴であつたためか、めだつ兄の前ではとりわけかげがうすかつた。それだけ気の毒であり、ひがむことも少なかつたのであろう。「不良性」をおびていたともいわれるが、兄、妹の間をうごきまわり、よけいなかげ口をきいてまわることもあつたらしい。道治は長くアメリカにいたが、のち、栃木、

徳島で英語の教師をしている。道治夫婦には子どもがなく、道治は昭和十八年に七十二歳で死去した。道治は第二次世界大戦中、内村鑑三の弟ということで老人ホームに入ることができたが、そこでもしばしばけんかをしたらしい。

妹の宜子(二八七六一一九四五)は、鑑三とは十五歳違いであり、明治二十九(二八九六)年、仙台で木村康託と結婚する。宜子は鑑三のもっとも貧乏な時代に、京都から、仙台へ嫁に出してもらっている。木村はのちに東北実業銀行支配人として活躍するが、大正九(一九二〇)年に死去する。このとき、達三郎以外のきょうだいが馳せ参じたという。

鑑三は三人の弟とは仲がわるかったが、晩年には宜子とは比較的仲よくしていたらしい。というより、木村の死後、鑑三はいろいろ宜子一家の生活の面倒をみていたということがあったらしい。宜子は昭和二十(一九四五)年に六十九歳で死去している。

順也(二八八〇一九??)は、鑑三とは十九歳違いであり、その後アメリカで十四年のながい生活をしたのち、帰国して関西学院中等部で英語の教諭をつとめたという。道治と順也のふたりは、鑑三の父宜之が勘当していたため、鑑三もあまり近づかなかつたらしく、くわしくはわからない。この他に、幼時に世を去った弟が二人いるといわれている。

補足するなら達三郎は、目が悪かったとされる。けれども、なかなかの努力家で新潟県の高田、それに高知・大阪・仙台・秋田などで、旧制中学校の教員をしながら、いくつもの書物の翻訳にあたっ

た。小原も書いているが、『イミターショ・クリスチ』(岩波文庫、一九二八・七)の翻訳などで知られる。彼ははじめは兄に同情的で、兄が不敬事件で孤立していた時には、兄の側に立った長文の論、「国家主義と個人の愛博」を『六合雑誌』(一四七号、一八九二・三・一五)に載せ、その弁護をするほどであった。そのような達三郎が「悪弟」となるのは、母ヤソの病の進行にはじまり、入院、葬儀をめぐっての争いがあったことを、右に紹介した生地竹郎の調査が伝える。末弟順也の死は、小原は不明とするが、近年の右の井上琢智の調査によれば、一九六五(昭和四〇)年九月六日である。

妹宜子のことは、先の内村美代子『晩年の父内村鑑三』が詳しい。鑑三を敬愛した木村康託と結婚した宣子は、仙台へ移り住む。夫康託は東北実業銀行を創業するなど、実業家として成功するので、宣子は経済的には楽な生活を保障され、鑑三はじめ内村家の人々は、木村家を頼ったという。この本のⅢ章2節に、「鑑三の親戚について」があり、両家のかかわりがかなり具体的に記されている。これも大事な情報と思われるので引用しておこう。

お宣さんの夫の木村康託さんの家は、伊達藩のお側頭取役をつとめた名家で「槍の木村」とも呼ばれ、康託さんの父上は辰辰の役に従軍して戦傷を負い、のち没せられたという。康託さんは東北実業銀行を創設したほか、東北地方の電力や製紙事業や、東北学院、仙台日々新聞(のち河北新報に吸収される)などの創立にも尽くされた名士であった。島崎藤村や高村光雲らとも交友があったという。

聞くところによると、康託さんは、のちの新宿中村屋の相馬

黒光女史が、郷里の仙台におられたころ、彼女に失恋し、その後、畏敬する内村鑑三の妹ということで、一も二もなくお宣さんを迎えられるのだということである。それは明治二十九年（一八九六年）のことで、父の宜之が京都から仙台まで付き添っていった。鑑三は当時、貧窮の底にあったが、この時の婚礼衣装は、鑑三の亡き愛妻、嘉寿子さんの残されたもので、立派な仕度だと評判になったということである。

康託さんの父上もまた息子が内村鑑三の妹をもらうことに全面的に賛成し、お宣さんは木村家で非常に大切にされたという。この父上は、宇都宮の青木義雄さんの主催による鑑三の講演会に出席されることもあったらしい。

康託さんは心から鑑三を敬愛し、ある時などは東京の内村家に、夏用の簾戸すだすだ全部を寄贈されたほどであった。大正九（一九二〇）年二月二十三日の鑑三の日記には、

「仙台なる妹の夫、木村康託永眠し、その葬儀に会せんがために、祐之と共に午後十時上野発汽車にて北上した。実に残念なることである。彼は正直なる、寛宏なる、尊敬すべき人物であった。東北実業銀行の支配人として信用厚く、彼の逝去は確かにこの地方の大損失である」

と、しるされている。木村家はゆたかだったので、お宣さんの兄弟、つまり鑑三の弟たちは皆ここをたよって行ったらしい。彼らがちょっと遊びに行っても、康託さんは馬車を用意して、松島などを案内してくださったということである。

鑑三は内村家の長男としての務めを誠実に果たしたものの、達三郎をはじめとする弟たちは、皆兄には従わなかった。右の内村美代子の著書には、達三郎は「明治三十三年、鑑三が主筆で、自分も同人である『東京独立雑誌』の廃刊を機に、弟ともども兄に反旗をひるがえし、同三十七年の母ヤソ子の葬儀の際には、ひどい侮辱を加えて兄を苦しめ、終生和解しなかった」とある。

さて、話を元に戻すと、一八六五（慶応元）年七月十五日、祖父長成が死去し、十月、父宜之は三十四歳で、「禄高五十石御馬廻役」の家督を継ぐ。宜之は当初藩主の侍講をつとめ、御側頭取に取り立てられていた。その学問が重用されたのである。彼には時代を見抜く目があった。それゆえ刀と槍という旧来の武器を中心とした軍隊の編制が、時代に合わないことを痛感し、その改革を藩主輝声と相談し、藩の重役会議に提案する。時代を乗り切るには、鉄砲や大砲による軍の編制が、どうしても必要と彼は強く信じていたのである。が、そうした軍政改革は、頭の固い重臣どもには受け入れられず、藩の意見は分かれ、提案は認められず、逆に藩の世論を惑わしたとして、宜之は御側頭取などの職を解かれ、高崎で謹慎という処分を受けることになる。維新前夜のことだ。宜之は敗者として江戸の藩邸を離れ、一八六七（慶応二年一月二十九日、家族共々高崎の家へと戻る旅に出る。佐幕派の武士の家に生まれ、その上に、父が他の藩士にねたまれ、一時謹慎処分を受けるなど、鑑三一家は、まさに敗者の地位に追い込まれたのである。

幕末の激動は、高崎藩にも及んでいた。官軍がやがて攻め入るといふ明治の維新の前に、佐幕派の高崎藩は、当初あくまで將軍慶喜を守るという名義のもとにいたが、慶喜が上野寛永寺に籠って恭順

の態度を示すと、江戸に向けて進軍中の東山道総督府の命に従うことになる。宜之の謹慎は、こうした歴史の中で起こった事件であった。それゆえ、その処分は一ヶ月後には、早くも解除されている。

宜之一家が江戸を離れ、高崎に移り住むようになった年、鑑三は満六歳であった。それまで江戸小石川の藩邸近くで育った鑑三は、見知らぬ土地高崎へ、家族と共に移動することになる。鉄道のない時代、上州高崎までの旅は駕籠である。鑑三は、三日ほどかかった旅の日々、父宜之から儒教の経書『大學』を教わる。その日から鑑三は、折々父から四書五経を本格的に学ぶことになるのであった。

三 群馬県高崎市

内村鑑三が幼少年期を過ごした群馬県高崎市は、かつて高崎藩の居城のあった町である。城下町として、また、中山道六十九宿中四番目に規模の大きい宿場町として江戸時代から栄えた町であった。明治以降は高崎線・両毛線・八高線、近年は上越・北陸新幹線が通じ、北関東最大の交通の要衝となっている。樺や檜の大木の目立つ町である。人口は市役所の話では、二〇一五(平成二七)年九月一日の推計で、三十七万六千一人とのこと。高崎は日本一のだるまの産地としても知られる。

わたしは対象とする人物を調べる際、生い立ちの地の調査から開始するのが常である。例えば豊島与志雄の評伝を書いた時には、生地である福岡県甘木市の探訪からはじめ、鑑三の弟子、矢内原忠雄を調べた時には、同様にその故郷、愛媛県今治市に行くことからはじめていく。いずれも成果は大きかった。後者の場合、今治がかつ

てキリスト教の町として知られていたということなどは、現地調査をして、はじめてわかったことである。内村鑑三の評伝を書くように思い立った今回も、まず、少年時代を送った群馬県高崎市への三回の探訪からはじめていく。

調査の開始に当たっていつも最初に訪れるのは、当地の市役所である。人は市役所のどこの窓口に行くのかと問う。答は観光課である。矢内原忠雄の評伝を書いた時にも、愛媛県の今治市役所観光課が最初の訪問先であった。高崎のことを調べるなら、図書館に行くのがよい、そうすれば戦前の『高崎市史』(全二巻、復刻版あり)や、戦後版の『高崎市史』(全三巻、高崎市史編さん委員会)、さらには時代別にも詳しい『新編高崎市史』(全一九巻)にも出会うではないかと言われそうだが、現地に行き、町を歩くことが、わたしには何よりも勉強になる。

近年はこの都市にも観光課は存在する。そこにはさまざまな地元資料が用意され、訪れる人に無料で提供されている。誰もが何部でも自由に持ち帰ることができるのだ。それらは市の歴史から産業紹介、出身人物、そしてエリア地図におよぶ。中には貴重な労作ともいえるものさえある。

現在の高崎市役所は、高松町三十五一に所在する。二〇〇八年五月に完成したという建物は、驚くように大きく、周辺を圧倒している。地上二十一階、地下二階建ての南北に長い楕円形の建物である。楕円形にしたのは、上州名物の空っ風によるビル風を防ぐための考案という。一階の受付で、ひとこと観光課の所在を聞くと、十三階にあるとのこと。すぐエレベーターに乗り直行すると、無料配布の群馬や高崎を紹介した資料が、山積みされていた。その中から

めぼしい物を選び、手にする。

今回第一回の高崎市役所行きでもらった資料で、一番役立ったのは、「高崎城下町探訪―歴史と文化財―」という八つ折りの小さなパンフレットである。高崎訪問の成果の一つとしてよいだろう。この宣伝パンフレットには、「高崎城と藩主」というコラムのほか、「近世の主なきごと」とか、初代井伊直政にはじまり、鑑三の父宜之の仕えた十九代輝声てるなに至る「高崎藩歴代藩主」と題した年表まで見出せる。裏面には地図が印刷され、高崎駅西口から市役所、そして高崎城があつた城址公園、さらに西の烏川からすがわに至る町の姿が把握できるようにになっている。実によくできた高崎案内パンフである。一例を挙げると「高崎城と藩主」には、次のようにある。

高崎城は西に自然の要害となる烏川が接し、残る三方を土塁と堀によって固められた囲郭式の城です。井伊直政（以下直政）は、交通の要衝である和田の地に、徳川家康から大規模の城を築くよう、命じられ、天正一八年（一五九〇）に落城した和田城を東へ拡張する形で城を築き、慶長三年（一五九八）、居城を箕輪から高崎に移しました。これが高崎城の始まりです。

他の資料にも、『たかさきあそび（歴史版）』（高崎市体験観光づくり研究会編）などもあり、それなりに参考になったが、ピカイチは右の「高崎城下町探訪―歴史と文化財―」であつたことを言い添えておく。いつたいどの団体が、こんな便利な案内パンフレットを作つたのかと思ったら、「高崎市教育委員会文化財保護課」と小さく印刷されているのを目にすることができた。わたしはこのパンフレット

の「高崎城周辺の寺社」に載っていた「頼政神社」の案内にしたがつて、頼政神社の境内に近年建てられた、鑑三の漢詩「上州人」の碑を見、写真に収めることができた。

市役所二十一階の展望ロビーからは、眼下に濠と土塁を残す旧高崎城を記念した城址公園と、白木蓮で知られる高崎公園が、そして多くの神社・仏閣が眺められる。高崎の人々に親しまれている烏川や碓氷川うすいがわの流れも目に入る。烏川は、高崎市街の北西から南東へとゆつたりと流れる大河。碓氷川はその支流の一つである。合流する箇所には魚が群れ、戯れている。少年鑑三が魚捕りに慣れ親しんだ川である。また、赤城・榛名・妙義の上毛三山と言われる山々も遠望できる。

先にも述べたが、高崎藩は徳川親藩である。それ故維新に際しては、一時、高崎藩主は將軍徳川慶喜と行動を共にするが、のち新政府の命に従って、官軍に向かう「賊徒」鎮庄に向かうことになる。そうした中で、宜之の謹慎も解かれる。年譜によれば、宜之は維新後、高崎藩所轄の陸前国（現、宮城県）牡鹿おしか・桃生ももぎ・本吉もとよし三郡の権判事、続いて石巻県の権少判事に任じられ、家族を石巻に呼び寄せている。石巻県は官軍が支配した旧仙台藩の一部であつた。さらに陸前国本吉郡北方総轄として気仙沼に赴任、のち家族も移転した。鑑三も二年ほど高崎を離れ、石巻、そして気仙沼での日々を過ごした。この時代鑑三は、父宜之から漢学を学び、漢学塾にも通つていた。鑑三の石巻・気仙沼時代のこととは、鈴木範久の『内村鑑三日録』^⑨に、若干の記述が見出される。

一八一（明治四）年七月二十二日。鑑三は二年ぶりに高崎に戻つた。父内村宜之が同月二十四日付で高崎藩少参事になつたためであ

る。父は鑑三を元服させ、祐之と名乗らせた。父の職名少参事とは、セクレタリー(秘書)のような役である。直之は、当時高崎藩知事に任じられていた旧藩主大河内輝声の懇望で、引き受けたという。

父と共に高崎に戻った鑑三は、鳥川近くの柳川町に住んだ。わたしが二度目の高崎現地調査で確かめたところでは、現在の地番で言うところ、高崎市柳川町十一である。市役所観光課で貰った地図を頼りに実際に行ってみると、そこは清水法律事務所になっており、「内村鑑三先生居宅跡」の石碑が建っている。ちよつと見過ごしがちな小さなものである。けれども、しっかりと揮毫の石碑である。そこから鳥川と碓氷川の合流する地点までは、子どもの足でも数分で行ける距離と確認した。鑑三は弟たちと他の遊び仲間ともども、故郷の川で魚採りに熱中した。その中には後年妻となる、八つ年下の、未だよちよち歩きの幼い横浜かず(加寿子)もいたという想いに、現地を歩きながら囚われたことも記しておこう(横浜かずのことは、第四章の三で詳説する)。

高崎時代の少年内村鑑三は、鳥川での水泳や魚とりに興ずる一方、旧藩主大河内輝声が設立した藩の英学校に入学、英語の勉強をはじめている。輝声は前にも書いたが、開明的な人物で、これからは英語が大事とばかり英学校を設立したのであった。鑑三の英語とのかかわりがここにはじまる。鑑三は十一歳になっていた。以後鑑三は、儒学の代わりに英語を熱心に学ぶようになる。同時期、のちに「憲政の神様」と称された尾崎行雄も、同じ英学校に学んでいたことが知られている。また、教えを受けた英語教師が、小泉敦という名であったことも。鑑三は記憶力抜群の少年であり、英語の基礎をたちまちマスターする。

幼少年時代を過ごした高崎は、内村鑑三にとってどのような意味をもつのだろうか。わたしは先に高崎を訪れ、頼政神社境内に建つ鑑三の漢詩「上州人」の碑を見、「写真に収めることができた」と書いた。それは以下のような文面のものである。

上州人

上州人(筆者意訳)

上州無智亦無才 上州人は無知で知恵なく、才能もない、
剛毅木訥易被欺 剛毅で飾り気なく、人に欺かれやすい。
唯以正直接萬人 ただ、正直をもつて、誰ともつきあい、
至誠依神期勝利 まごころを尽くして、神による勝利を待つ。

七言絶句のこの漢詩の意味は、漢文を履修した高校生なら誰もが分かるほど、明瞭である。上州人に託して鑑三自身を詠んだ漢詩としてよいだろう。鑑三の直筆文字は、決して上手とは言えない。愛弟子矢内原忠雄の楷書の字に比しても劣る。しかし、筆遣いや字配りなどはしっかりとっている。碑文に用いるには、個性のある文字としてうってつけである。碑は一九六一(昭和三六)年の建立である。この碑の上部には、白御影石が用いられ、そこには鑑三がアメリカのアマースト大学卒業にあたって、自身の墓碑銘のためにと書き留めていた、I for Japan; / Japan for the World; / The World for Christ / And All for God. (わたしは日本のために、日本は世界のために、世界はキリストのために、すべては神のために)が、四行分ける英文で刻まれている。

碑は鳥川と碓氷川とを見下ろす頼政神社の一角に建つ。よい場所を得ての建立だと感慨ひとしおであり、去りがたい思いに満たされ

た。鑑三は夏になると、台地の下に流れる烏川や碓氷川での魚取りに熱中した。「余の家は時に上州高崎にありて余は何時しか殺生の快楽を覺りたれば、夏来ることに余は其付近の山川に河魚の捕獲に余念なかりき。余の父は余が読書を放棄して、鑿、搦手、鉤等の製造修繕に従事するを見て甚だ不興の面を示せしと雖も、余の全身は碓氷、烏両川の水産物に在りし事なれば、嚴父の些少の叱責のときは余の省みる処にあらざりし……」⁽¹⁰⁾とは、後年の彼の言である。いま一つ彼の印象深い回想に聞こう。晩年の一九二八(昭和三年)十月十九日の日記に記されたものである。全文を引用する。

上州高崎光明寺に主婦と共に先祖の墓に参りた。朝家を出て夜に入つて帰つた。是れ亦日本人として為さねばならぬ義務である。墓参を終へて後に烏川の畔に至り、遙かに榛名碓氷の連峰を眺めながら我少年時代の事共を思ひ出した。柳川町に我が父の家の跡を尋ねた。初めて手習いに行きし白井老先生の邸宅の前を過ぎた。熊野神社は我が迷信時代の崇拜物である、此日丁度其祭礼であつた。凡てが六十年前の事共である。山の形は変わらず、川は依然として流る、其内に我が少時の友なる淡水魚類は棲む。唯釣魚に耽る我を誡めし父の声を聞かない。噫我も亦上州人である。此んな者に成らうとは夢にも想はな「か」つた。今の高崎聯隊正面前にありし藩臺にて東京より招きし小泉先生より学びしABCが後に役に立つて、日本全国にパウロ、アウガスチン、ルーテルの唱へしキリストの福音を伝ふるに至つたのである。感慨何ぞ堪へん。

少年内村鑑三は、上州高崎の自然に親しみ、特に魚取りに熱中した。当時の彼は、どちらかというと、がき大将であつた。政池仁はそのことに触れ、「彼も普通一般の子供と同じように川に魚とりにも行き、他の子供たちとけんかもした。彼はけつしておとなしい、はにかみやではなかつた。むしろ手におえぬ腕白小僧であつたらしい」と言う。

高崎という土地は、少年内村鑑三の成育に大きな影響を宿す。そこで小原信のように、「时期的には短かいが、鑑三が物心ついてより、遊んだり学んだりした所は、江戸ではなく上州高崎であつた」とし、「のちに札幌で魚類学を専攻することに少なからずあづかっている」との見解を示す評者もいる。確かに高崎という町は、鑑三にしばしば「上州人」を意識させる、こころの故郷であつたのだ。

高崎には寺社が多い。先に市役所の観光課で貰つたものとして紹介した「高崎城下町探訪―歴史と文化財―」には、「高崎城周辺の寺社」として寺が十七、神社が四つ短いコメント付で採り上げられ、さらに廃寺として六つの寺が紹介される。裏面の地図には、その場所も分かるよう書き込まれている。その中の一つ光明寺には、内村鑑三家五代の墓がある。中の二つは鑑三が建立したものである。わたしは三回目の高崎訪問で光明寺に行き、墓を確認した。少年鑑三はこれらの寺々、いくつもの神社の神々に目を見張り、信じて礼拝する。後年の「余はいかにしてキリスト信徒となりしかわが日記よ」⁽¹¹⁾には、以下のようにある。

私は信じていた、しかも心から信じていた、無数の神社の一つ一つにそれぞれ神が住んでいて、各自の管轄区をゆだんなく

守り、その神の不興を買う者は、誰にせよ、たちどころに罰せられるということ。それらの中でも、私が最も崇め尊んでいたのは、読み書きと手習いと神であった。私は毎月の二十五日に、正式に潔斎し供物をささげてその神を祀った。私はその偶像の前にぬかずいて、習字が上達し暗記力が増すようにと一心に祈った。そのほかに、米作をつかさどる神がいた。この神と人間との間の使い走りをするのは白狐しろきつねである。この神には、われわれの家を火事と盗難とから守りたまえと祈ることができた。わが家は父が留守がちで、母と私だけのことが多かったので、貧しいわが家をそうした災難から守りたまえと、わたしは絶えずこの神に祈った。さらにもう一つ、私が最もおそれていた神があった。その神のしるしは黒からすでこの神は人の心の奥を探るのである。この神社の宮司は、黒ずんだ色にからすを刷った神を発行していたが、この紙には、うそをついた者がそれを飲めばたちどころに吐血するという、ふしぎな性質があった。私はしばしば友だちに、自分の主張を疑うならこの神聖な紙を一枚使って自分の誠実をためすがよいと言って、自分の正直なことを立證したものである。

ここには「学問の神」と「米作をつかさどる神」と「人の心の奥を探る」神という三種の神が扱われている。明治維新後、神道国教政策の下、神社神道は大きく伸びる。が、一般庶民の間では、さまざまな信仰がさまざまな形で存在していた時代である。内村鑑三が少年時代を過ごした高崎には、諸教が混在し、人々はシンクレティズム、——諸教混淆の中に生きていたとしてよいのであろう。鑑三

もその例外ではあり得なかったのである。

四 有馬私学校と東京英語学校

時代は、明治維新を体験していた。佐幕派の高崎藩は、時代の流れに歯向かうこともならず、官軍に協力し、難局を乗り越えることになる。そうした中で内村鑑三の父宜之は、石巻県権少参事や陸前国本吉郡北方総轄や登米県少参事など地方職を転々とした後、一八七一（明治四）年の七月の廃藩置県に伴い、高崎に戻り、高崎藩少参事に任じられていた。鑑三は十歳になっていた。

廃藩置県は、王制復古に次ぐ第二のクーデターとされる。藩は県となつて、旧藩主は失職し、各県には中央政府から県令が派遣された。鑑三の父宜之は、こうした時代の動きの中で、翌一八七二（明治五年五月六日、高崎県が群馬県に統合されると貫属を免官となつてしまふ。以後、宜之は第一線から身を引き、二度と公務には就かなかった。

平岡敏夫の『佐幕派の文学史』¹⁵は、佐幕派なるがゆえに薩長藩閥政府の下では出世できず、その不遇感がエネルギーとなつて明治の文学や宗教の指導者となった人々のことを、実証的に解き明かす。また、鈴木範久は、鑑三の父宜之の不遇な生涯は、息子鑑三に引き継がれたとし、佐幕派内村鑑三の生涯の歩みを論じ、次のようにまとめる。¹⁶

佐幕派の藩を出自とする内村の心に深く刻印された「野」の精神は、薩長閥に代表される「官」に対する反感を強く植え付け

けた。一時的には「官」に所属する時期もあったが、決して居心地のよいものではなく、最後は第一高等中学校から深手を負って追われるにいたる。以後、「野に叫ぶ者」として生きる道を歩むしかなかったのである。

的確な内村鑑三評である。後年の彼の起こした不敬事件の背景には、その信仰のみならず、薩長藩閥政府への反感があったことが、指摘されているからだ。鑑三が父宜之から家督を相続するのは、西南戦争の起こった一八七七(明治一〇)年、札幌農学校に入学した直後、未だ十六歳のことであった。家督とは、旧民法での規程であり、戸主の身分に付随するすべての権利・義務をさす。鑑三は十六歳で、この責務を負うことになる。

高崎に戻った鑑三が、藩主大河内輝声の開いた高崎藩英学校に学んだことはすでに記した。父宜之の勧めでもあったようだ。父は儒学の権威であったが、新しい時代は英学が担うことを見抜いていた。それ故に宜之は鑑三のみならず、その弟達三郎にも英学を学ぶことを勧めた。高崎藩英学校がいつまで続いたのかはわからない。

一八七三(明治六)年三月、鑑三はこれまた父の勧めもあつて単身上京し、有馬私学校という学校の英学科に籍をおいて、本格的に英語を学ぶようになる。それは高崎藩英学校で、英語力に抜群の力を示すようになった鑑三の当然の道行きであったといえよう。有馬私学校の校主の有馬頼咸は、旧久留米藩主であり、学校はその私邸内にあった。東京都公文書館所蔵の「東京府 明治六年私立学校明細調」によると、学校所在地は東京府赤坂表三丁目一番地、学科は皇漢兼学、英学、数学、習字となっている。鑑三はむろん主に英学

を学ぶために通ったのである。

なお、右の「明細調」によると、有馬私学校の教師人数は十八、外国人二となっている。生徒総数は二〇七名、うち女子十四名とあるから、当時にあつてはかなり大きな私立学校であったようだ。授業時間は、これも右の「明細調」によると、毎週月曜日から土曜日まで、午前七時から午後二時までとなっている。十六歳以上の生徒が多い中であつて、鑑三は十二歳での入学であった。この学校で鑑三は、後年日本銀行総裁となる三島弥太郎と出会い、共に学んでいる。ちなみにこの三島とは、後年アメリカのアマースト大学でも一緒に学んだ時期があつた。

有馬私学校時代、鑑三は『新約聖書』に出会う。後年彼は次のように回想している。¹⁷⁾

東京青山に於て始めて英国女教師某(宣教師に非ず)より新約聖書物語一冊を貰ひ受けし時に余は既にジーサスクライスト(余は当時未だ主の名を日本音に於て知らざりし也)を拝せんとの念を起した、余が基督教普及の今日、何時かキリストを信ずるに至らんことは疑なき所である。

ここに出てくる「英国女教師某」は、ピアソンという名のイギリス人の婦人であつた。鈴木範久の『内村鑑三日録1』¹⁸⁾にくわしい考究がある。内村鑑三がはじめて教会通いをするのは、有馬私学校時代のことである。『余はいかにしてキリスト信徒となりしかわが日記より』¹⁹⁾には、次のような回想が記されている。

ある日曜日の朝、一人の学友が「外人居留地の某所へいっしょに行かないか。きれいな夫人たちが歌をうたうし、それから長いあごひげをつけた、背の高い男が、高い壇の上で両手を振りまわし、体をくねらせ、実に風変わりな様子をして、叫んだり、わめいたりしているのも見られるよ。しかも入場はいっさい無料なんだ」と言つて私を誘つた。これが、友人の目につつたキリスト教会堂の礼拝の様子で、当時の私にはまだ耳新しい外国語で行われていたものである。私は友人とともに初めてそこへ行つたが、べつに不愉快な所とも思わなかつたので、その後は日曜日ごとにそこへ通つた。しかし当時の私は、このような常習的行為のもたらす恐ろしい結果については何も知らなかつた。私に英語の手ほどきをしてくれたあるイギリスの老婦人は、私のこの教会通いを非常に喜んだが、しかし彼女もまた私の「居留地への日曜遠足」が単なる物見遊山であつて、真理の探究ではないということには気づかなかつたのである。

右の回想中に見られる「私に英語の手ほどきをしてくれたあるイギリスの老婦人」も、ピアソンであると鈴木範久は言う。

有馬私学校時代の内村鑑三のキリスト教受容は、ここで本人も言うように、「居留地への日曜遠足」であり、「真理の探究」ではなかつた。ただし、こうした体験が、この後の札幌時代における信仰告白と結びついて行くのは、紛れもないこととしてよい。

一八七四(明治七年)三月、内村鑑三は一年間学んだ有馬私学校から、官立の東京外国語学校英語学下等第四級に編入する。彼は十四歳になつており、入学資格の「小学教科ヲ卒業シタルモノニシテ

年齢十四歳以上」の応募条件を満たしたからであつた。有馬私学校も、当時としては施設も教員も充実した学校であつたが、鑑三は将来を慮つて、こちらの学校の英語科を選んだのである。同級に末松謙澄・野村龍太郎・土方寧^{やすし}・天野為之らがいた。同年十二月、東京外国語学校の英語科は、独立して東京英語学校となる。入学者急増のためであつた。そして一八七七(明治一〇)年四月、東京大学予備門と改称された。

大島正健の『クラーク先生とその弟子たち』^②に、「東京英語学校」の項があり、東京外国語学校時代も含む歴史が記されているので、以下にその部分を引用する。

明治七年前後に神田一ツ橋通り、現在の学士会館の前、元の商科大学の敷地内に、辻新次郎氏が校長であつた東京外国語学校という官立学校があつた。英語科・仏語科・独語科・露語科・漢語科に分れて、普通学に加うるにそれぞれの外国語を教授していたが、明治七年十二月それ等の中で生徒の数が一番多かつた英語科を分離して独立させ、これを東京英語学校と名づけ、外国語学校々舎の向う側の榊原邸に移つた。この学校は明治十年に廃せられて大学予備門となり、これを卒業すると後の東京大学である開成学校に進学するようになっていた。英語学校の教育方針は全部英語の正則主義で、米英人が主として教師となり、下級には邦人が加わり、最下級は邦人のみで担当した。学級は一級から六級に分かれ、一級から三級までは一組、四級は甲乙の二組、五級は甲乙丙の三組、六級は甲乙丙丁の四組から成り、各級担任教官指導の下に、毎月もしくは二三カ月に小

試験が行われ、成績優秀なものは上級へ抜擢される制度になっていた。

世は蘭語時代を経、英語時代に移り、多くの俊才がこの学校を希望して全国から集まって来るようになっていた。すでにかんりの英語力をつけていた鑑三は、ここで、さらに学力を身につけることになる。が、好事魔多し。上京後の無理もたまたたか、彼は胸部疾患に侵され、一年ほどの休学を余儀なくされる。これは鑑三にとつて大きな打撃であった。多くの内村鑑三伝は、この休学を記すけれども、その内実には迫っていない。鑑三自身にも、この休学に関する記述を残していない。

若き日の一年余の休学は、向学心に燃える彼のプライドを、大きく傷つけたに違いない。が、何が幸いするかは分からない。この休学で一年足踏みすることで、彼は終生の友となる宮部金吾や太田(新渡戸)稲造と同級になったからである。この学年には後年憲法学者となる穂積八束がいて、成績抜群、復学した鑑三もかなわなかったという。高崎の内村一家は、鑑三の健康を心配したこともあつたか、その間に上京し、一八七六(明治九)年五月二十八日付で東京市小石川区中町二十三番地に居を定めた。翌年復学した彼は、この地から学校に通った。

東京英語学校時代の教師で、鑑三に強い印象を与えたのは、マリオン・スコット (Marion McCarrell Scott) というアメリカ人であった。スコットはアメリカ合衆国ケンタッキー州の出身。一八四三年八月二十一日の生まれで、ヴァージニア大学卒業の教育者である。森有礼に乞われ、一八七一(明治四)年来日し、鑑三らに英語を教えた。

彼は翌一八七二年以降、東京高等師範学校はじめいくつもの学校で教育学を担当、近代的な学校教育の必要を説いた。帰国後はハワイに移住し、教育視学官やハイスクールの校長をするなど、教育行政官としても尽力した。スコットに関しては、早く鑑三の評伝を書くことを志し、資料収集や『内村鑑三全集』の編集に力を尽くした鈴木俊郎の『内村鑑三伝 米米留学まで』(岩波書店、一九八六・一)に詳しい調査がある。

なお、鑑三の後年の回想「スコットメツソドの復活と浦口君のグループメツソド(談)」²¹には、以下のようにある。

スコット氏は我邦における小学校教育の開拓者として、明治初代の文化史上彼の大きな貢献の故に記念さるべき外国人中屈指の一人である。彼の功労は文部省大正十一年度の編纂物、学制五十年史にもしるされて居る。其二十二頁に曰く「明治の初年に来朝した米国人エム・エム・スコットは米国に於ける小学校教育の實際を我が国に伝へて、教科書、教具、教授法の発達等に少なからぬ功績を残した」と。此人の英語教授を大学予備門に於てうけた時、私等は全く一の新天地に導き入れられたやうに感じた。その以前に行なはれた英語教育をかためて居たのは単語暗記主義と文法尊重主義とであつた。然るに此人によつて、私等が教へられたのは全然その反対であつた。といふのは単語一つ一つの意義を記憶させられるよりも、寧ろ若干数の言葉が相集つてなして居る集団の内容を理解するやうに導かれたのであつた。此等の集団を名付けて文法学者はフレーズとかクローズとか云ふであらうが、其名称は兎に角として、私等は当

時此等をもつと広義に解してゐた。

さらに鑑三はことばを続けて、「こゝに一例をあげるならば」と言い、自身の体験を踏まえたスコットによる英語教育の方法を述べる。

God is love と云ふ一文は三つの単語によつて出来てゐる。これを切り離して、第一は名詞で主辞、第二は動詞で単数三人称現在、而して第三は名詞で complement であると仕分けてみても、思想上何等の意味も出て来ない。然るにこれを一のグループとして見れば、即ち「神は愛なり」といふ意義に於て解すれば、そこに直ちに深い意味と大いなる力があらはれて来るであらう。スコット氏のお陰で、私等の注意は単語の煩はしさより解放されて言葉の集団が有する其内容の意味に初めて導き入れられた。

東京英語学校時代にスコットという優れた教育者と出会つたことは、以後の鑑三に、否、鑑三ばかりか宮部金吾や太田（新渡戸）稲造ら、この後、札幌農学校で苦樂を共にする同学の友の語学学習に、大きな影響を与えたのであつた。例えば宮部金吾は東京英語学校時代を振り返り、「一級の教師はスコット (Scott) と云ふ米国の教育家で、英作文を教へる事が非常に巧みであつた。この組に入つてから英作文の上達は飛躍的であつたと思はれ、それが非常に後年のためになつた」と言っている。若き日、鑑三はよき師に巡り合うことが多かったが、マリオン・スコットは、その一人であつたと言えよ

う。

前述のように東京英語学校は、一八七七（明治一〇）年四月に東京大学予備門と校名を変更している。この年二月、西郷隆盛を擁立した反政府反乱の西南戦争が起つていた。戦争は一万五千の西郷軍が熊本城を攻撃するのに始まつたが、落とすことが出来ず、逆に各地から集まつた政府軍に追い詰められる。田原坂たはらざかなどの激戦で敗れた西郷軍は、大分や宮崎方面へと敗走し、山間の間道を通り抜けて鹿児島へと向かう始末であつた。結局、九月二十四日、城山に籠もつた反乱軍は、政府軍の総攻撃によつて西郷は自刃し、戦争は終止符を打つ。前年（一八七〇）の神風連しんふうれんの乱、萩の乱、秋月の乱を鎮圧した明治新政府は、維新後最大の難局をここに乗り越えたことになる。時代は確実に移つていたのである。

そうした中でも新政府は、教育に力を入れはじめていた。蝦夷地が北海道という名に改められたのは、一九六九（明治二）年八月十五日のことであつた。明治新政府は開拓使を北海道に派遣し、北門防衛・北方開拓の名のもとに、北海道の開拓に乗り出すことになつた。北海道開拓使長官となつた黒田清隆は、一九七二（明治五）年東京芝増上寺近くに開拓使養成の学校を建てていたが、開拓事業の顧問に招聘したアメリカの農政家ホーレス・ケブロン (Horace Capron) の提案を容れて、一八七六（明治九）年、これを北海道の札幌に移し、札幌農学校（のちの北海道大学）を開校する。ここに高度な人材の育成を目指した新たな高等教育機関が誕生したのである。鑑三の在籍した東京英語学校からは、前年の生徒募集に際し、十一名が第一期生として応募し、入学していた。

ところで、東京英語学校（東京大学予備門）で、開拓使堀誠太郎が

ら札幌農学校の官費生募集の演説(口頭説明)を鑑三が聴いたのは、この年(一八七七)六月十四日のことであった。堀は朝比奈英三の「堀誠太郎について」⁽²³⁾によると、森有礼に従って一八七〇(明治三)年渡米、マサチューセッツ農科大学に入学、学長のクラーク(William Smith Clark)を知る。同校卒業後の一八七五(明治八)年帰国し、開拓使東京出張所に勤め、のち来日したクラークの通訳兼書記の仕事のため、札幌農学校に勤務するようになる。

前年開校した札幌農学校の校長は、開拓使少判官の調所広丈(姓は初め「ずしよ」、のち、「ちようしよ」と読ませた)であった。クラークは教頭として招かれたのである。クラークの任期は一年、任期を無事終えるに当たって彼は堀誠太郎を伴って上京した。堀は東京に於ける生徒募集の任をも担っての上京であった。この日鑑三とともに堀誠太郎の話聴いた宮部金吾は、次のように回想している。

氏はその時初めに北海道の開拓を説き、更に進んで北国の風物を非常に興味深く面白く話され、終りに官費制度の事を詳細に語られた。学費の乏しかった士族の子弟が多かったので、官費であるといふ点が特に注意をひき、十二名も志願する結果となり、時の校長服部一三氏を驚かす事となつたのである。

堀誠太郎は札幌農学校の魅力を①北海道開拓という崇高な使命
②自然豊かな北国の風物のすばらしさ ③金がかからず、制服・制帽のほか、靴やレインコート、小遣いまで支給されるという、官費制度の有効性を三つに絞って語った。

一八七七(明治一〇)年七月二十七日、内村鑑三は札幌農学校第

二期生として、入学が許可された。前年患った胸の病気は、幸い完治していた。鑑三にとって官費生として勉学を続けられることは、大きな魅力であったに違いない。彼がそれまで通っていた東京英語学校は、前述のように東京大学予備門と校名を変更、志望すれば同校在學生は、そのまま予備門を経て帝国大学に入学できた。けれども、官立とはいえ授業料があり、学習にまつわる教材費・生活費はなまなかのものではなかった。まして、父宜之は県庁勤めを辞め、無職である。父が妻子を養うには、少しばかりの蓄えや恩給ではどうにもならぬことが、鑑三にはよく分かっていった。それだけに官費で学業を続けられるのは、ありがたいことであった。それは一人鑑三のみならず、同じく札幌農学校を志望した宮部金吾・太田(新渡戸)稲造ら佐幕派の武士の子の多くが望んだ、学問継続の手段であったのだ。

結局、堀誠太郎の巧みな入学案内もあって、東京英語学校(東京大学予備門)からは、鑑三をはじめ十一名が第二期生として入学を志望し、許可された。他に工部大学校から五名、長崎英語学校から二名、私費留學生が二名志望したので、計二十名が札幌農学校の二期生ということになる。

注1 内村鑑三『三省の意義』『東京独立雑誌』第37号、一八九九年七月

一五日、のち、『内村鑑三全集7』収録。一七五ページ

2 山本泰次郎『内村鑑三ベルにおくった自伝的書翰』新教出版社、一九四九年七月一〇日。九ページ

3 斎藤宗次郎『恩師言 内村鑑三言行録・ひとりの弟子による』教文館、一九八六年四月二〇日。一三三ページ

- 4 鳥井 足『評伝・内村鑑三』あさを社、一九七九年三月一日。一四ページ
- 5 内村鑑三「予の宗教的生涯の一斑」『聖書之研究』第29号、一九〇二年十二月二〇日。のち『内村鑑三全集10』収録。四一八ページ
- 6 内村鑑三『余はいかにしてキリスト信徒となりしかわが日記より』山本泰次郎・内村美代子訳『明治文学全集39 内村鑑三集』筑摩書房、一九六七年二月二五日。三四ページほか。なお、英語で記された原文は、『内村鑑三全集3』収録
- 7 矢内原忠雄『内村鑑三とともに』東京大学出版会、一九六二年一月一五日。二九四ページ
- 8 鈴木範久『内村鑑三』岩波新書(岩波書店)、一九八四年二月二〇日。七〇八ページ
- 9 鈴木範久『内村鑑三日録1』教文館、一九九八年二月一〇日。二四〇～二六ページ
なお、この『内村鑑三日録』は全二巻、「日録」の名に恥じない労作である。
- 10 内村鑑三「過去の夏」『東京独立雑誌』第40、42号、一九九九年八月一五、二五、九月五日、のち『内村鑑三全集7』収録。二二五ページ
- 11 内村鑑三「日記」『内村鑑三全集35』収録。三七五ページ
- 12 政池 仁『内村鑑三伝』増補改訂新版、教文館、一九七七年一月三〇日。二九ページ
- 13 小原 信『評伝 内村鑑三』中央公論社、一九七六年九月二五日。二二～二三ページ。なお、小原には内村鑑三研究の集大成として、『内村鑑三の生涯』PHP研究所、一九九二年二月二日、同文庫版、PHP研究所、一九九七年六月一六日もあり、これが決定版と見なされる。
- 14 注6に同じ。三六ページ
- 15 平岡敏夫『佐幕派の文学史』おうふう、二〇一二年二月一〇日
- 16 鈴木範久『内村鑑三の人と思想』岩波書店、二〇一二年四月二六日。五ページ
- 17 内村鑑三「回顧と前進」『聖書之研究』第95号、一九〇八年一月一〇日。のち『内村鑑三全集15』収録。三七三ページ
- 18 注8に同じ。三七ページ
- 19 注6に同じ。三六～三八ページ
- 20 大島正健『クラーク先生とその弟子たち』帝国教育会出版部、一九三七年七月五日、のち、遺族の大島正満・大島智夫による補訂版が出ている。新地書房、一九九一年二月一日。引用は補訂版による。二二ページ
- 21 内村鑑三「スコット メツソドの復活と浦口君のグループ メツソド(談)」『グループ メツソド』改訂三版、のち『内村鑑三全集』第30巻収録。五五～五七ページ
- 22 宮部金吾博士記念出版刊行会『宮部金吾』岩波書店、一九五三年六月一〇日。三三ページ
- 23 朝比奈英三「堀誠太郎について」『北大百年史編集ニュース』第三号、一九七七年二月二〇日
- 24 注22に同じ。三三ページ

受領日 二〇一七年八月三〇日
受理日 二〇一七年一月八日